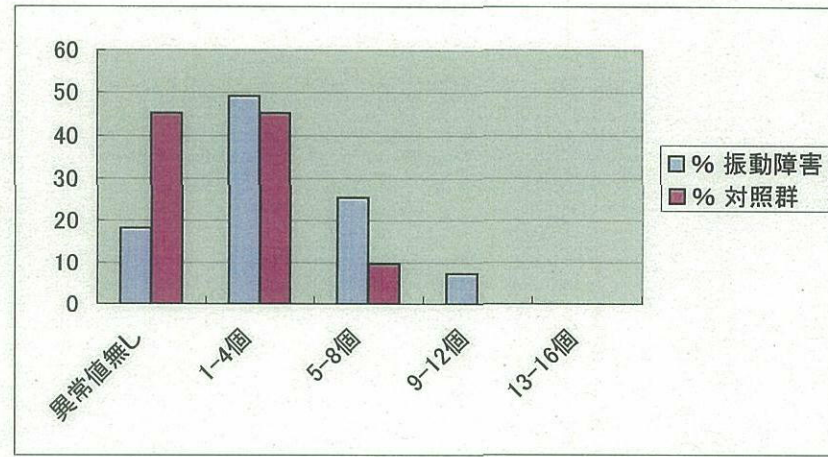
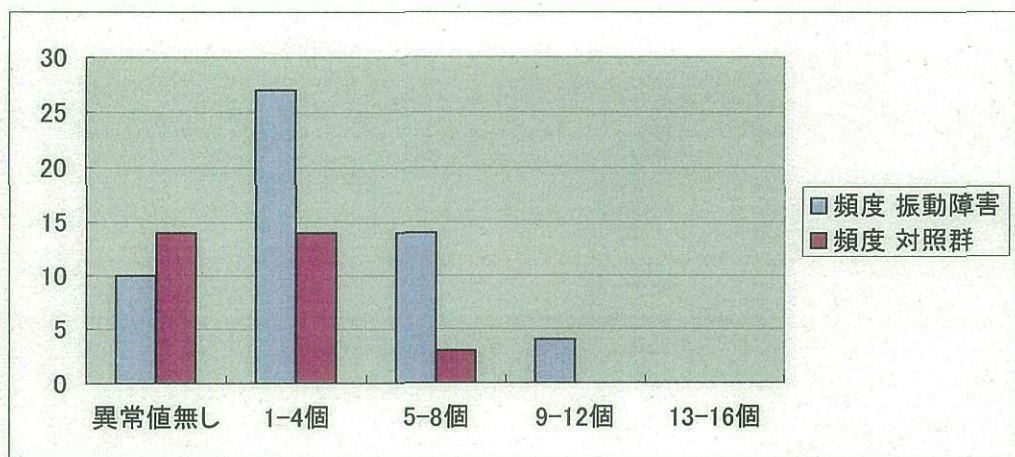
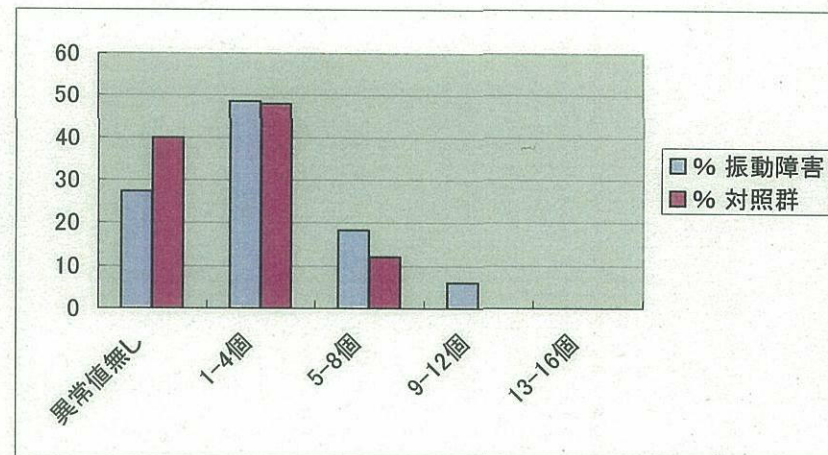
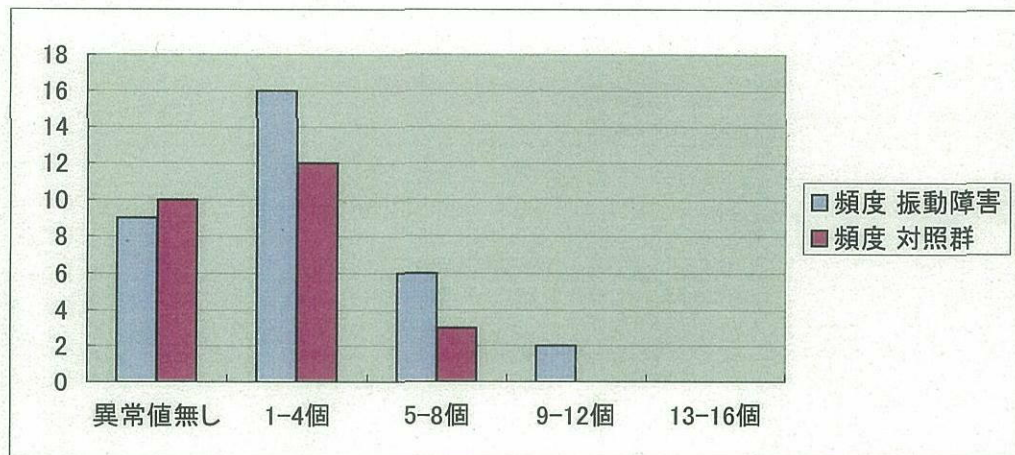


<まとめ>



31

2002129306

振動障害患者の血管と神経障害の15年間のfollow-up

Author : 黒沢洋一(鳥取大学 公衆衛), 那須吉郎, 石垣宏之, 篠原泰司

Source : 日本職業・災害医学会会誌(1345-2592)49巻5号 Page474-477(2001.09)

論文種類 : 原著論文

シソーラス用語 : 血管疾患; 職業病; 神経系疾患; 追跡研究

医中誌フリーキーワード : Raynaud現象

チェックタグ : ヒト

Abstract : 振動障害検診により振動障害と認定され、15年以上経過観察された患者99例(初診時平均41.9±7.1歳)を対象に、カルテに記載された自覚症状、検査所見に基づいて、ストックホルムスケールを用いて末梢血管障害と末梢神経障害の経過について検討した。神経障害の経過評価のできた88例中、肘部管症候群による尺骨神経麻痺の14例を除外した74例の初診時平均年齢は49.4±7.1歳、振動工具の平均使用期間は10.7±5.5年であった。神経障害と血管障害のストックホルムスケールによる症度は有意の相関がみられたが、必ずしも両者の障害程度はパラレルではなかった。神経障害の初回受診時の症度と15年後の症度の変化は少なく、改善傾向はみられなかった。血管障害の初診時と15年後の変化では改善傾向がみられたが、レイノー現象発作がなくなる例はそれほど多くなく、stage 3まで進行した例では70%以上が15年後もレイノー現象を経験していた。以上の結果から振動障害は早期の段階からの対策が必要であると考えられた

43

2001104827

「振動障害」とその周辺

Author : 有泉誠(琉球大学 保健医)

Source : 沖縄県医師会報(0917-1428)385号 Page52-57(2001.01)

論文種類 : 総説

シソーラス用語 : 職業病; 振動

チェックタグ : ヒト

- 13 2005071488
振動障害の末梢神経機能評価法について
Author: 榎原久孝 (名古屋大学 医学部保健学科)
Source: 末梢神経 (0917-6772) 15巻2号 Page10-15 (2004. 12)
論文種類: 解説
シソーラス用語: 末梢神経系疾患; 振動障害; 感覚閾値; 痛覚閾値; アンケート; 筋力低下; 握力
チェックタグ: ヒト; 中年 (45~64)
- 15 2005008479
振動障害の末梢神経障害に対する電気生理学的研究
Author: 小川真司 (慶応義塾大学月が瀬リハビリセンター), 木村彰男, 大田哲生, 辻哲也, 宮下和久
Source: 末梢神経 (0917-6772) 13巻1号 Page41-46 (2002. 12)
論文種類: 原著論文/比較研究
シソーラス用語: 電気生理学; 末梢神経系疾患 (診断); 振動障害; 筋電図; 皮膚温; 神経興奮伝導; 神経検査; 活動電位
医中誌フリーキーワード: 神経伝導速度
チェックタグ: ヒト; 成人 (19~44); 中年 (45~64); 老年者 (65~79); 男
Abstract: 振動障害認定患者5名と振動障害未認定振動工具使用者5名について, 正中・尺骨神経伝導検査およびF波の測定を行った。正中・尺骨神経の運動・感覚神経伝導検査では, 振動障害患者では振動工具使用者に比べて手掌刺激による潜時, 遠位潜時の遅延, 神経伝導速度の低下を認め, 末梢優位の神経障害の存在が示唆された。振動障害患者の正中神経伝導検査では, 感覚神経伝導検査の遠位潜時に遅延を認め, 手根管症候群を生じている可能性が考えられた。振動障害患者の尺骨神経の運動神経伝導速度は, 肘上刺激では肘下よりも低下する傾向にあり, 肘部管症候群を生じている可能性が考えられた
- 23 2003251639
正中神経, 尺骨神経の神経伝導速度分布パターンに及ぼす加齢と振動工具使用の影響
Author: 那須吉郎 (山陰労災病院 振動障害センター), 石垣宏之, 黒沢洋一
Source: 日本職業・災害医学会会誌 (1345-2592) 51巻1号 Page58-66 (2003. 01)
論文種類: 原著論文/比較研究
シソーラス用語: 振動障害 (診断); 加齢; 神経興奮伝導; 尺骨神経; 正中神経; 労働衛生; 筋電図
チェックタグ: ヒト; 成人 (19~44); 中年 (45~64); 老年者 (65~79)
Abstract: コリジョン法を用いて正中神経及び尺骨神経の運動神経伝導速度分布パターン (DMCV) と知覚神経伝導速度パターン (DSCV) を正常対照群と振動工具使用者群で測定した。正常対照群は20歳代20例, 30歳代20例, 40歳代20例, 50歳代20例, 60歳代20例の計100例, 振動工具使用者群は平均66.9±7.4歳の35例である。加齢が進むにつれて比較的速い伝導速度を有する神経線維の相対的減少と比較的遅い伝導速度を有する神経線維の相対的增加が観察された。この現象はDMCVよりもDSCVにおいてより著明であった。これらの変化はストックホルムスケールの進行につれて, DMCVとDSCVのいずれともより顕著になっていたが, 特にDSCVでは著しい変化が認められた。振動工具使用者群では正中神経と尺骨神経との比較ではDMCV及びDSCVの両者とも変化の程度に差はなかった
- 30 2002271330
振動障害患者の神経学的検査結果の経過
Author: 黒沢洋一 (鳥取大学 公衆衛生), 須賀吉郎, 石垣宏之, 篠原泰司, 細田武伸
Source: 日本職業・災害医学会会誌 (1345-2592) 50巻2号 Page93-96 (2002. 03)
論文種類: 原著論文
シソーラス用語: 職業病; 神経検査; 神経興奮伝導; 感覚閾値; 握力
チェックタグ: ヒト
Abstract: 振動障害患者74名の初回受診時から15年間の神経学的検査の経過について分析した。対象者を初診時の年齢 (50歳未満と50歳以上) と末梢神経障害のストックホルムスケールにより4群に分け, 右利きが多いため右手について検討した。その結果, 右正中神経の神経伝導速度では4群とも15年間に有意の変化はみられなかった。振動知覚閾値は10年経過後も有意な上昇はなく, 15年後では50歳未満の重症者で上昇していたが, 集団としての検査値の経過は10年以上増悪や改善はなく, 比較的安定していた。握力値の経過では, 4群とも10年以降, 初回に比較して有意の低下がみられたが, この低下は加齢によるものと推測された